

『地質学者ナウマン伝』（朝日選書）を上梓して

矢島道子（地学史、大学非常勤講師）

このたび『地質学者ナウマン伝』を上梓した。興味のある人々に読んでほしいと思っている。特に日本の地質学がどんな歴史をたどってきたかに興味を持っている人、あるいは、日本の悪口をいって森鷗外に批判されたナウマンということを知っている方には、ほんとうはどうだったのか、読んでほしいと思う。本書は科学史の本と思って上梓したが、amazon は歴史学と地球科学のジャンルに入れた。私自身は科学史の研究というよりも、なんだかカイミジンコの化石の研究の連続のような気がしてしかたがない。化石研究の指導者からはあくまでも事実にもとづいて議論せよ、ベーコン主義に徹するようにと強く指導された。化石研究中は、フィールドを歩いて、調査して、帰ってきて、まとめると、ちゃんと調査したはずなのにどうしても矛盾だらけになる。仕方がないから、またフィールドに出かける。この連続だった。ナウマン研究も同じで、何度も何度もドイツに通い、四国を歩き、フォッサマグナを歩き、矛盾だらけなのに悩んだ結果が本書である。なんとか、矛盾をほどこいて、筋だった本にできたように思うだろうか。

## 1. ナウマン研究のはじまりから完成まで

私は東京大学理学部地質学教室を卒業した。ナウマン（Edmund Naumann 1854-1927）は初代教授のはずだったが、教室には写真も銅像もなかった。あったのは日本人教授のものばかり。変だなあと考えた。そのうちに、ナウマンの授業の聴講ノートを図書室でみつけた。ナウマンについて調べたいと思った。1994 年頃のことだった。その後、いろいろあり、2010 年頃、朝日新聞出版の山田豊さんからナウマンの伝記を書いたらどうかと声をかけていただいた。それから、いろいろ調べ始めたが、牛歩が続いた。ナウマンへの悪口が多く、ついついナウマンを応援すると、今度は相手を悪く言わなければならない。また、なかなか新しい資料が出てこず、どうしても手垢にまみれた資料を使うことになる。

天が微笑み始めたのは、ナウマンの最初の妻がわかったときだ。これで、かなりのことがわかってきた。ナウマンの奇妙な学歴も、帰独後に大学教授になれなかったことも解決できそうだと思った。ナウマンが離日にあたって歓送会で踊る場面は、横山又次郎の著書を偶然みつけて、その中にあった。小川眞里子さんの大部の著書『病原菌と国家』の中に明治 17 年のコレラをみつけて、ナウマンが滞日を延期したことがわかった。ナウマンは決して追い出されたわけではなかった。

1 番むずかしかったのは森鷗外との論争であった。論争の中へ入れば入るほど、鷗外の文章のうまさはどうやって太刀打ちするのか、方針がたたなかった。そんなころ、友人が別の用件で鷗外の小説『大発見』を教えてくれた。これだと思った。鷗外が留学して、ドイ

ツ公使である青木周蔵に「鼻糞をほじる民族に衛生学など不要」と言われ、必死に鼻糞をほじる民族をみつける話である。小説の中には鷗外のお辞儀の仕方がおかしいとドイツ人にかからわれたことや、実験でガラス棒を箸のように器用に使って珍しがられた話もある。これで鷗外がナウマンに論争をいどんだことを説明しようと考えた。

## 2. ナウマン伝でつたえたかったこと

ほんとうは、ナウマンの地質学的業績が素晴らしいことを書きたかった。ナウマンの作成した地質図が素晴らしいのだ。それで、表紙カバーも口絵もナウマンの描いた地質図にした。これはヨーロッパの古本屋から 22 ユーロで購入してあった。現在の日本の地質図はナウマンの基本構想の上にある。中央構造線も東北日本も西南日本も内帯も外帯もみんなナウマンが最初に提唱したことだ。ただ、ナウマンの地質学の素晴らしさは、地質学を多少心得ないと理解できない。叙述のむずかしいところだった。明治のころの日本の地質学者たちは、日本の国の発展に乗じて、ナウマンの業績を無視したかったし、亡きものにしたかった。原田豊吉は当時の大家の地質学者ジュースの解釈にしたがって、ナウマンと論争した。地質学者で唯一文化勲章を受章した矢部長克はナウマンのフォッサマグナの解釈を曲げてしまった。

最近ようやくフォッサマグナの研究に新しい光が入りつつある。最初のナウマンの叙述に戻ることが 1 番早道ではないかと言われつつある。口絵のフォッサマグナの写真をみてほしい。フォッサマグナについての写真表現はたくさんあるが、富士山を入れた写真は本邦初である。ナウマンは、富士山がフォッサマグナの成因に大いに関係すると考えたからだ。なぜ若いナウマンがやってきたのか、学生との葛藤がなぜ起こったのか、なぜナウマンは最初の妻ゾフィーをめぐって決闘しなければならなかったのか、なぜドイツで伝記が書かれなかったのか、なぜ、帰独後大学教授になれなかったのかなどは本書に書き込んだ。読まれて理解されたい。

## 3. まだわからないこと

都合 25 年間も調査したが、まだわからないことは多い。ナウマンがマイセンのどこで生まれたのかわからない。ゾフィーとどこで出会ったのかもわからない。ナウマンがなぜ地質学者になろうとしたのか、ドイツのどこの地質をよく知っていたのかもわからない。河路昇も誰だかわからない。あるいは、思いもよらない新しい資料が出てくれば、ナウマンの像は変わるかもしれない。でも、まずはここで筆を置いておく。

### 文献

小川眞里子(2016)『病原菌と国家—ヴィクトリア時代の衛生・科学・政治—』名古屋大学出版会

森鷗外(1995)大発見、『舞姫 キタ・セクスアリス——森鷗外全集 1』, ちくま文庫。